

# 共同研究「異言語・異文化に触れる活動」

—幼稚園における実践的研究—

池 中 雅 美  
米 田 佐 紀 子  
澁 谷 良 穂  
(執筆順)

## はじめに

本稿は2000年度から継続して金沢市内の幼稚園二園（以下 A 園・B 園とする）行っている共同研究「異言語・異文化に触れる活動」——幼稚園における実践的研究——の2001年度の実践報告である。

前回の紀要では、「就学前異言語・異文化活動の意義について」、「幼稚園での異言語・異文化理解の実践と考察」、「アンケート・観察に基づく実践に対する評価」、「小学校英語活動からみた就学前異言語・異文化活動の意義と今後の課題」についての報告を行った。今回は、1年目の実践に基づいて反省を行い、それを踏まえて行った2年目の活動について報告する。第一章は A 園、第二章は B 園の活動内容の実践報告を、それぞれ各園で英語活動に実際にかかわっている指導員である池中及び米田が担当した。第三章では保護者対象に行ったアンケート結果についての考察を澁谷が行った。

## 第一章 A 園での活動報告

2000年度より共同研究「異言語・異文化に触れる活動」として、金沢市内の2つの幼稚園での英語活動が始められた。筆者（池中）は2000年度 A 園と B 園で時々活動に加わっていたが、2001年度より A 園での活動を担当することとなった。年長児19名と年中児15名の2クラスで毎週1回20分づつの英語活動である。ここでは、A 園で行なった実践内容を報告する。

### 第一節 2000年度の反省を踏まえて

当初の目的にそった活動内容であったか、どういった効果がみられるのかなど、次年度への参考とするため、2000年度の活動を振り返り、幼稚園教諭と英語活動指導員との間で確認した事項を記載する。

まず、この活動に対する園の方針の確認を行なった。園では、英語遊びを取り入れるねらいとして、「異文化のふれあい、つまり自分と違うものに目をむけ、ありのままに『違い』を『違い』として受け容れる心を育てることの一つとして、言語としてのふれあい、文化としての親しみの多い英語を取り上げる」ことを挙げている。また、「(1) 英語の出会いから国際感覚の芽生えを導く、(2) 英語を知ることに興味を持つ——違う言語文化を知ること喜びを持つ、(3) 英語コミュニケーション学科とともに幼児の英語のとらえ方、異文化のふれあいの中での成長を考察する」という

ねらいが明確になった。

次に日本語の使用については、2000年度は日本語をあまり使用せずに行なってきたが、必要な時に単語・フレーズレベルで使用する事とした。

また、園児の中には英語を習っている子どもとそうでない子どもがいる。その子ども達の格差があり、英語を習っていない子どもにとっては英語活動をあまり楽しめなかったのではないかという反省点から、より簡単な教材を選ぶ事とした。絵本についても単語レベルのものや単文のものから始める事とした。

これらの確認事項を踏まえて、2001年度は5月より活動を開始した。

## 第二節 実践内容

5月～12月までで17回の英語活動を行なった。年長児は2000年度に英語活動を行なったので、年中児と年長児は異なった内容の活動をした。以下にそれぞれのクラスで行なったことを述べる。

### (1) 年長児のクラスでの活動

このクラスで取り組んだのは主にあいさつ、絵本、手遊び、歌である。

まず「あいさつ」であるが、指導員が“How are you?”と聞くと“How are you?”と答えが返ってくるため、“How are you?”と聞かれて“I’m fine. How are you?”と答えられるようにすることを目標にした。そのためにはまず始めに“I’m fine. How are you?”が自信を持って言えるようにすることが必要である。手をたたかせたり、指導員がカスタネットを打ったりしてリズムにのせて言えるように練習した。次にボールを子ども一人ずつに投げ、受け取った子どもが“I’m fine. How are you?”と答えるようにすることで定着を図った。毎時間の始めにこのようなあいさつを繰り返すことである程度は定着したように思われる。

絵本は主に3冊取り上げた。前期は*A Teddy Bear*と『おばけがぞろぞろ』である。*A Teddy Bear*のほうは捨てられていたテディベアを洗い、目や口などをつけてかわいらしいテディベアに戻していくというストーリーで体の部位を表す言葉が導入できる絵本である。“I put back his ....”という繰り返しがあること、また、体の部位の絵の裏にマグネットをつけ、バラバラになったクマをもとに戻すことも楽しんだ。

『おばけがぞろぞろ』は日本語の絵本である。子ども達が大好きな絵本であるということで、本学の Clapsaddle 講師の協力を得、英訳した。様々なおばけの名前は日本語のまま、「あそびましょう」、「あそぼう」などの言葉は“Let’s play.”とし、この繰り返しを楽しんだ。毎回子ども達の楽しんでいる顔を見ることができた。また、幼稚園教諭からは普段の生活の中でも、友達の名前をよんで、“Let’s play.”という子どももいたことを聞いた。

10月からは幼稚園で行われるクリスマス会での発表を視野に入れて、*Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?*を取り上げた。体が横に揺れるような心地よい英語のリズムを提示するには最適の絵本の一つであると思う。このリズムに合わせて言葉を発せられるよう、手をたたいたり、カスタネットを使ったり、またメトロノームを使ってテンポよく言えるように行なってみた。1週間に1回であるのでなかなか覚えられないと思うが、普段の生活の中で日本語で書かれたその絵本を

読み聞かせてもらったり、英語を言う練習をしている様子が、1週間ごとに感じられた。やはり1週間1回20分だけではなかなか定着させるのが難しいのが現状である。毎日少しずつ、あるいは状況が許せば、普段子ども達が生活をしている中へ指導員が幼稚園を訪れ、自然に英語に親しめる環境を作ることが望ましいように思われる。A園では、幼稚園教諭からの要望で英語活動で歌った歌の歌詞のコピーを渡している。普段の生活の中で活用されている様子がうかがえる。

英語のリズムを感じてもらうために、もう一つの方法としてチャンツを用いることが有効ではないかと思う。前半は、笑っている顔、泣いている顔、歌っている顔の絵を紙皿に描き、laughing、crying、singing という言葉を導入したあと、“This is a face. This is a face. This is a face of laughing.” 等とし、手拍子などを交えてチャンツとした。

後半は Hot potato という遊びを取り入れた。Hot potato（じゃがいもあちち）はボールをふかしたてのじゃがいもにみたてて、輪になりすばやく次の人に渡していくゲームである。普段の幼稚園での生活の中でしている遊びを英語活動の中でも取り入れるという試みである。ここでも“Hot potato. Hot potato. Hot. Hot. Hot.” というようにチャンツにして声をかけてみたが、ボールをまわすことに夢中になっていてあまり聞いていなかったようである。ボールをまわす前に手をたたいてチャンツを声に出して言わせるなど、もう少し導入に工夫が必要であったと思う。

チャンツを用いること、そしてカスタネットやタンバリンといった楽器を用いることによって、子ども達全体に活気が出るように思われる。また、チャンツを繰り返すことにより、子ども達にも自信が出て、大きな声で言えるようになってきたようである。そして、日本語と異なった英語独特のリズムに慣れ親しんできているように思われる。

## (2) 年中児のクラスでの活動

年中児は年少児だった2000年度の終わりに少し年長・年中児たちの活動の中に入っていたが、2001年度から初めて1週間に一度の定期的な英語活動を始めた。手遊び、動きのある歌なども行なったが、子どもの興味を一番引けたのはエプロンシアターであった。特に『くいしんぼゴリラ』のエプロンシアターが気に入ったようであった。ここに出てくる banana、lemon、onion という単語はもちろん、最後にタマネギがなくなってしまった時の“Oh, no.”といった表現も何人かの子どもはよく繰り返していた。

後半は Five Little Monkeys Jumping On The Bed を取り上げて数回繰り返し読んだ。この話の中でベッドからサルが落ちるところがあるが、その時に“Oh, no.”といった子どもがいた。「くいしんぼゴリラ」の時の言葉が、場面は変わってもその状況に応じた反応が見られたのは非常にうれしかった。その言葉が使える状況を子どもが判断し発話したことは、英語活動を通して使える英語、自己表現ができる力がわずかではあるが身についたと言えるのではないだろうか。

この年中のクラスで、もう一つ子どもの興味を引いたものとして挙げられるのは、体の部位をリズムに合わせて動かしたり、触ったりするものである。“Hands, hands, clap, clap, clap. Eyes, eyes, blink, blink, blink.”などに始まり、鼻、口、肩、足などを動かす活動である。しばらくして慣れてくると、もっとやりたいという子どもが多く何度も繰り返し行なった。そのうちに、“Faster.”

という言葉覚えて「もっと早くしたい」という要望を言えるようになった子どももいた。リズムに乗せることによって、より楽しく効果的に活動ができたように思う。

### 第三節 英語のリズムに関する考察とまとめ

英語は強勢拍のリズムを持ち、音節拍のリズムを持つ日本語とは異なっている。この英語の異なったリズムを身につけるためには、やはり幼児のころから聞き慣れ親しむことが大切であると思う。リズムを作り上げるために必要な要素、例えば音の連結、同化、脱落、弱形などといった現象も音をかたまりとしてとらえ発話していくことで、文字を学習していない幼児にとっては、リズムを身につけやすいという効果があると思う。

幼稚園では英語のリズムをなるべく意識しながら、英語活動を行なってきた。手をたたいたり、カスタネットやメトロノームを使ってテンポよく、英語のリズムにのせて言えるようなチャンツなどを取り入れてきた。その効果がすぐには見られないにしても、繰り返し続けることによって、英語のリズムは日本語とは異なっているということに、少しでも気づかせることを目標として活動を続けていきたいと思っている。

児童英語教育の世界では今や多くのリズム教材が出されている。その中で注目したい一つにマザーグースがある。マザーグースはイギリスやアメリカの子ども達の間で古くから伝承されてきた童謡である。文の意味はナンセンスに思えるものも多いが、音を楽しむという点で取り入れたいと思っている。マザーグースには韻をふむ語が多く出てくるし、韻が唄の内容を決定している場合も少なくないようである。この韻と強弱を楽しみながら英語のリズムが身につくように工夫をしていきたいと思っている。今までに *London Bridge is Falling Down*、*Hickory Dickory Dock*、*Head, Shoulders, Knees and Toes*、*Ring-A-Ring O'Roses* を導入してみた。まだ言葉がしっかりと唄えるというわけではないが、唄とともに遊びを通してアメリカ、イギリスといった英語圏の文化を紹介することも可能であると思う。

私たちは日本のわらべ歌などを意味も分からず言葉だけ覚えているということがある。「文字を使わない声の世界の記憶は、強いリズム、均衡がとれた型、反復、対句などの使用、韻を踏んだり決まり文句と慣用表現、決まった話し方など、記憶を助けるような形式にしたがっている」（「児童心理学」（無藤隆著 放送大学教育振興会））という点で、まだ文字を学習していない幼児にとっては記憶を助けるような形式となっているマザーグースが英語活動に適しているといえるのではないだろうか。

今後の英語活動も英語のリズムに焦点をあてつつ、子どもが楽しく、英語の音を楽しみながらできる活動を行なっていきたいと思っている。絵本、歌、手遊びなどの導入の仕方などまだまだ工夫が必要であると思うので、今回のアンケートの結果も参考にし、今後の活動に役立てていきたいと思う。

## 参考文献

無藤 隆 (1998). 『児童心理学』放送大学教育振興会

## 使用教材

ささき まき (1988). 『おばけがぞろぞろ』福音館書店

中谷 真弓 (1998). 『エプロンシアター くいしんぼゴリラ』株式会社メイト

中本 幹子 (2000). *A Teddy Bear*. Apricot.

Carle, Eric. (1983). *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?* New York: Henry Holt and Company.

Christelow, Eileen. (1989). *Five Little Monkeys Jumping On The Bed*. New York: Scholastic.

(第一章担当：池中雅美)

## 第二章 B園での活動報告

筆者(米田)は昨年に続き、2001年度も金沢市内の私立幼稚園(B園)で英語活動を行っている。昨年の年長児のみの活動から、本年では年中児と年長児の2学年が英語活動を行う事になった。昨年英語活動をした子どもは2001年3月に卒業しているので、今年度の子ども達は幼稚園で英語に触れるのは初めてである。両方の学年で7クラスになることから、指導員2人で学年ごとに分担する事となり、米田は年中児を担当している。この報告書では米田の担当している年中児について行う。

### 第一節 幼稚園の概要

この幼稚園はコンピュータ、器械体操等を取り入れたいわゆる早期教育に熱心な大規模幼稚園である。子ども達は年中のうちから文字やドリルなどにも触れる機会があり、今回の聞き取りテストでも鉛筆を持つ事に加え、自分の名前まで書ける子どもも多く見受けられた。

### 第二節 英語活動の概要

まず、2000年度から2001年度に変わる段階で幼稚園教師と指導員が集まり、2000年度の反省会を行った。それをもとに2001年度の計画を立てていくためである。そこで出てきた意見として、以下のようなものが出された。

- (1) 英語活動を行うことについて、母親たちの反応は好意的であった。
- (2) 2000年10月に指導員が行ったアンケートによって英語活動が行われている事を初めて知った母親や活動内容がそこで分かったという母親等がいた。

以上のように2000年度については英語活動を導入して1年目だった事もあって保護者への周知があまり徹底できなかった点は反省点としてあげられる。

また、指導員からの意見としては、以下の通りであった。

- (1) クラス全体がまとまっているので、とてもやり易く楽しかった。
- (2) 集団でよくできるので、下手をすると個人が見えないまま進んでしまう事があったのではないかな。
- (3) 2000年度は毎回内容の異なる教材を扱った前期のやり方にたいして、後期には絵本を中心にしてお繰り返し行うやり方を採用したが、その変更に伴う長所・短所などについてもう少し話し合う機会があると良かった。
- (4) クラス担任の先生方の関わりが上手で、英語活動をする上でとても助かったので、今後もます

ます積極的にお願いしたい。

ここでも分かるように、忙しい幼稚園であるだけに、指導員と先生方とのコミュニケーションが十分ではなかったことが分かる。

以上の反省から2001年度では、話合いの結果、以下のように行う事になった。

- (1) 時間は年中も年長も1回20分とする。
- (2) 年中も年長も初めて英語に触れるので、文化的トピックや基本的な学習内容は同一のものを2学年で扱う。
- (3) 日本語は基本的に使用しないが、片言は使える「ふり」をする。補助については、特に去年まで二人で指導員が当たっていた形式と異なり1人の指導員なので、クラス担任の先生方にますます積極的にお願いしたい。
- (4) 日頃の活動から使える教材を英語活動でも使用すると英語の定着が図れるのではないかと思っ  
て提案をしてみたが、幼稚園の教育内容が多く、忙しいことから独立した教材を用いるほうが  
望ましいと幼稚園側から要望が出され、そうすることになった。1回20分という短時間でできる  
ような工作・活動を考える。
- (5) 教案は2000年度と同様、前の週の金曜日までに指導員が幼稚園にファックスする。
- (6) 必要な教材があれば、購入を含め幼稚園と相談していく。
- (7) どのようなものでも良いので幼稚園や保護者からの意見や感想があれば何でも伝えて頂く。

以上の話合いから、2001年度の計画を以下のように立てた(表1参照)。しかし、これはあくま  
でも計画であり、幼児の様子を見つつ臨機応変に対応する事とした。教材については章末のリス  
トを参照して頂きたい。また、B園は英語活動にも熱心で、出来るだけ毎週行ってほしいという要望  
が強く、活動回数は4月から3月まで35回前後の予定を1年間に組んでいる。

表1 年間予定表

	文 化	文 型	トピック	お話・歌・手遊びなど
4月	Easter	How are you? What's your name? What's ...?	色、動物、場所	<i>What's Easter?</i> (日本語の本を元にした自作教材)
5月	Mother's Day	Where is ...?	身の回り、家族	<i>Where Is Family?</i> (指遊び)
6月	Father's Day	Where is ...?	身の回り、家族	<i>Where Is Family?</i>
7月	たなばた		1週間	<i>The Three Little Pigs Seven Steps</i>
9月		命令形	動作	<i>The Three Little Pigs</i>
10月	Halloween	How many?	数	<i>Where's the Halloween Treat?</i>
11月	Thanksgiving		食べ物	<i>The Story of Christmas</i>
12月	Christmas		色、天気、	<i>The Story of Christmas</i>
1月	すごろく		動作、色、天気、 食べ物	
2月	Valentines' Day	I like —.		
3月	復習			

### 第三節 実際の活動に関する報告と考察

#### (1) 絵本を扱う事について

去年の流れから、中心となる「絵本」を一つ設けて、そのテーマに沿って活動を行うほうが、毎回異なる教材をするよりも子ども達には良いという感想を指導員もクラス担任も持ったので、今年は必ず何か読み物教材を使い、それを中心に数回にわたって行うという形式にしてみた。

いざ活動を開始してみると週1回20分で1ヶ月に4回の進み方では、子ども達が違和感なく教材に親しむには内容にもよるが時間数が足りないように感じられた。結局、4月のみの予定であったイースター（復活祭）も5月まで入り込む事になった。イースターというあまり親しみのない行事ではあったが、それを紙芝居にして先生に日本語で読んで頂き、それをきっかけにして色やウサギといったものの英語を導入し、最後にはエッグハンティングをして締めくくった。その時点でアンケート等を取る時間がなかったので子どもの理解度や満足度を知る事はできなかった。

7月には七夕もあったが *Twinkle Little Star* 以外は物語や指遊びなど20分の活動として行うものが特になかった事から、6月下旬から『3びきのこぶた』を中心に活動を進めた。『3びきのこぶた』は良く知られている話なので違和感がないのではないかという理由で選んだ。9月の月上旬まで含めて7回にわたって扱った。子ども達は、オオカミの台詞である “I will huff. I will puff. I will blow your house in.” という台詞を徐々に覚え楽しんで一緒に言うようになった。しかし、その一方で最初の子豚は藁の家、2番目の子豚は木の家、3番目の子豚は煉瓦の家などという素材についてはかなり難しい思いをしたようである。

筆者は必ずフラッシュカードで単語の導入を行った。その際日本語でも確認する。それでも分からない場合は、教室に持ち込める実物は持ち込んで見せたりもした。意味、発音、リズムには毎回注意し手をたたいたり、体全体でリズムを取るようにした。しかし、藁・木・煉瓦については最後まで覚えられなかった子供が多かったようである。このことは後程述べる聞き取り調査で、結果として顕著に表れている。

#### 第四節 絵本以外の教材・教具について

教具は教材として扱う題材を学びやすくするものが望ましい。上記でも述べた『3びきのこぶた』はエプロンシアターにもなっているので、絵本で学んだものをエプロンシアターでも行う事によって絵本に飽きた子どもや、絵本では理解できなかった子どもにとっても楽しいようであった。エプロンシアターで『3びきのこぶた』をした際には絵本で定着していたオオカミの台詞がきちんと大きな声で言える子どもが多い事が分かった半面、絵本で言えなかった *straw*, *wood*, *brick* などはいっまでも覚えられなかったようである。つまり「楽しい」と「覚える」は必ずしも同一線上にあるとは言えないという事である。

パペットは動物の鳴き声を扱った題材の時に使用した。動物が鳴いているのと同時に口をパクパクさせる事によって意味を伝えるのに有効であった。またそれだけでなく、子どもにも鳴き声に合わせてパクパクさせるように伝えて持たせても有効であった。

当初の計画では5月は母の日、6月は父の日であったが、区別して進める事より「家族」として

指遊びをしたほうがスムーズに行きそうだったこと、定着を図るためより多く繰り返せるという理由から、“Where is father?” から始まり “Where is family?” で終わる指遊びを中心に、家族の単語を入れた。軍手に家族員の顔をつけ、両手にはめて挨拶しあうものを利用した。子ども達を引き付けるには有効であった。

教材の一つとして『くいしんぼゴリラ』のエプロンシアターを入れ、子ども達が日本語で知っている歌を英語版に作り替えて毎行行った。この英訳には本学の Marie Clapsaddle 講師に援助をお願いした。子供達が歌に慣れた頃、本来バナナ・レモン・玉ねぎであるところ、子ども達の好きな果物に入れ替えて行ったりもした。その際、フラッシュカードで果物を幾つか紹介した。ここで分かった事は、知っているものを英語でやるという橋渡しがあるという長所がある反面、日本語から英語にした時に生じるリズムの変更などが子どもには障害となり得るという事が分かった。時間をかけるにしたがって慣れていったが、当初予期したほどの定着はできなかったと感じている。

## 第五節 考 察

筆者は自分の子どもが年少児であること、日本で生まれ日本の保育所にずっと通っているという事から教材の提示や教授法については一度その子どもで試して、指導者自身が子どもに納得してもらえたと確信が持てるものを使うようにしてきた。この事はほとんどの場合成功するのだが、同じことをしても我が子は定着するのに幼稚園児には定着しない、あるいは有効でないという事が起きる場面に何度か遭遇し、その理由を考えてみた。教材・教具・指導法が同じでも子どもによって定着するかしないか、興味を持つか持たないかは、勿論個人差もあるのだが、この場合環境が影響をしているようであった。例えば、子どもに興味が出て「～をやって」と周囲にいる大人が頼まれたとき、すぐにやってあげられるという事が、子どもの興味や欲求を満たす事になり、それが更なる動機づけになっていく。また、繰り返しが必然的に多くなるので定着もしやすくなる。この点について、幼稚園側からも、幼稚園で英語指導員がいなくても流せるテープや CD を求められており今後それに答えるべく検討をしている。

## 第六節 聞き取り調査から見た子どもの理解力

教材として『3びきのこぶた』を扱ったことはすでに述べたが、筆者は子ども達は英語活動によって何をどれくらい学んでいるのかを調査したいと考えていた。しかし、年齢が4歳から5歳であること、1回の英語活動は20分しかないという現実から考えて、どのような実施形態ならば信頼性のあるデータが得られるか考えていた。

筆者が英語活動を行っている幼稚園では鉛筆を持ってドリルをする事などに慣れている子ども達だったので一斉テストで今まで行った題材の絵を基に、丸付け形式テストを行ってみる事にした。テストの概要は以下の通りである。

### <テストの目的>

1. 英語活動で学んだ英単語の聞き取り能力を調査する。
2. 物語と日ごろの生活で触れるものとの理解度に差があるかを調査する。



## ＜テストの方法＞

1. 図1のように幾つかの絵が書いてある紙を1人ずつに配る。
2. ルールをクラス担任が日本語で説明する。
  - (1) 指導員が読んだものにまるをつける。
  - (2) 隣の人と相談したり見たりしない。
  - (3) 分からなければ分からないと手を挙げ、指導員とクラス担任に「？」をつけてもらう。これによって子ども達は分からなければ素直に分からないといっても構わないこと、指導員も子どもが答えられなかった事が明確にわかり、○をつけ忘れたからではない事が分かる。
3. 一度一番上の問題で練習させ、やり方が分からない子どもがいないようにする。
4. 各問題ごとに上記のルールを確認し、分からないという子どものテスト用紙の該当箇所に「？」マークをつける。

## ＜テスト結果と考察＞

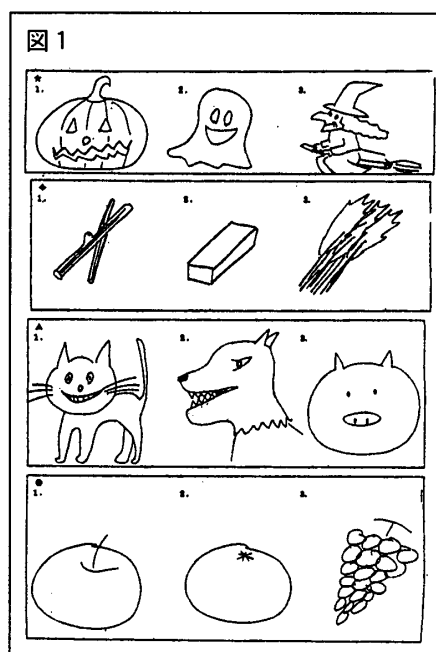
以下が、幼児数64名から得られた結果である。

	1			2			3		
	正 解	不正解	分からない	正解	不正解	分からない	正解	不正解	分からない
回答数	29	23	12	63	1	0	59	2	3

本来は文の聞き取り能力テストをしたかったので、『3びきのこぶた』の絵本の場面をそのまま使ったテストを作り、試しに日本語でクラス担任主導で行った。その内容としては、「先生のお話は一体どの絵と一緒にですか？一緒にの絵にまるをつけてください。」というものであったが、日本語でも混乱してできない子どもがいた。日本語でできないものを英語でやるという事は、「英語ができない。だから嫌いだ。」という子どもをいたずらに作り出す事になりかねないのでこの方法はやめ、単語レベルで作り直すことにした。

単語レベルにすると子ども達は態度が一転し、自信ありげな様子になった。図1における最上段の「★」マークの欄はその時行っていたハロウィンから題材を取った。カボチャ提灯 *Jack-o-lantern*, オバケ *ghost*, 魔女 *witch* の中から *witch* を選ぶというものであったが、多くの子どもが正解をしていた。練習段階で隣の子どもの回答を見たがる子どももいたが「必ずしも隣の子が合っているとは限らない」ということを伝え、極力見ないように指導した。平均22名のクラスをクラス担任と指導員である筆者二人で監督し実施した。

最初の問題は、図1の2段目の「◆」で、『3びきのこぶた』に出てくる家作りの材料から出題した。*straw*, *wood*, *brick* の中から *wood* を選ぶというものであった。結果は64



名中29名が正解で不正解が23名、分からないと答えた子どもが12名であった。つまり、半数以上の子どもが、*straw*, *wood*, *brick*と言われてもそれが何のことか分からないまま7回の活動を行っていたという事になる。

図1の3段目の「▲」は『3びきのこぶた』のオオカミ *wolf*、ブタ *pig*、そして物語とは何の関係もないネコ *cat* から *wolf* を選ぶというものであった。64名中63名が正解し1名が不正解だったことから分かるように子ども達には *wolf* がオオカミでありブタやネコではない事は定着していたようである。

最終問題「●」は『くいしんぼゴリラ』で扱ったリンゴ *apple*, ミカン *orange*, ブドウ *grapes* といった食べ物から出題し *grapes* というリンゴやミカンよりはなじみがないものを選択するものであった。64名中59名が正解し2名が不正解、3名が分からないと回答した。上記第二問の「▲」よりは正答率が低いもののほとんどの子どもは正しく答えている。

今回のテストの問題数が3問9項目という中で、子どもの語彙に関する聞き取りテストや英語活動全体に対する理解力の判断を行う事はできないが、それでもある傾向は見られたのではないかと考える。

- (1) 物語はストーリー性があることから語彙やフレーズを文脈の中で繰り返して自然に行う事ができる反面、子ども達の生活から切り離されたものが題材になっている場合、定着しにくく忘れやすいのではないか。
- (2) リンゴやミカンなどのように日ごろの生活で頻繁に触れるものについては、そのもの自体に親しんでいるので定着しやすい。
- (3) カタカナで日本語に入っているものは聞いても簡単に覚えられる。

## 第七節 まとめ

以上が今年度で2年目となる幼稚園での英語活動の一部についての報告・考察である。1クラス22名ほどの年中児に1週間20分ずつ、歌・指遊び・踊り・絵本と様々なことがらを通して英語という言語と異文化に触れる活動を行ってきた。この活動によって子どもたちが将来意欲を持って、英語学習に取り組めるように、また発音や聴覚理解においても、役に立てばと願っている。

その一方定着を図るつもりで利用した絵本が、たとえ日本語でなじみがあっても英語ではなかなか定着しない傾向があることが見られることが分かり、指導員がいなくても見たり聞いたりできる教材を入手し、幼稚園に置くなどの工夫が必要なが分かった。現在は様々な教材から一部選んで、使いやすく手を加え、活動に用いているので、生の教材をそのまま幼稚園に渡しても利用してもらう事が難しい。

本章では指導員の目から見た英語活動について述べてきたが、澁谷が行ったアンケート調査なども参考に今後とも有意義な英語活動と調査を行っていきたい。

## 使用教材

- Beall, Pamela Conn and Susan Hagen Nipp. (1981). *Wee Sing and Play: Musical Games and Rhymes for Children*. [with cassette]. Los Angeles: Price Stern Sloan.
- . (1984). *Wee Sing for Christmas* [with CD]. Los Angeles: Price Stern Sloan.
- . (1998). *Wee Sing Games, Games, Games* [with cassette].  
New York: Price Stern Sloan.
- French, Vivian and Jane Chapman. (1999). *The Story of Christmas*.  
Hong Kong: Candlewick Press.
- Swears, Linda & Lorna Lutz Heyge. (1991). *The Kindermusik Series* [with cassettes].  
North Carolina: Music Resources International.
- Ziefert, Harriet. (1985). *Where's The Halloween Treat?* New York: Penguin Books.
- 中谷 真弓 (1998). 『エプロンシアター くいしんぼゴリラ』 株式会社メイト
- . (1998). 『エプロンシアター 3びきのこぶた』 株式会社メイト

(第二章担当：米田佐紀子)

## 第三章 幼稚園における英語活動アンケート結果に基づく考察

本章では、これまで見てきた二園の保護者を対象に、2001年11月初めに実施したアンケート結果をもとに、幼稚園における英語活動について保護者がどうとらえているかを考察する。また保護者の目を通して園児の日常生活における英語との関わりも見ていきたい。これらの感想・観察・意見を検証することは今後の英語活動のあり方を考える上で、非常に有意義であろう。以下、アンケートの質問とその結果を示し、それぞれ分析を行っていく。なお、アンケートは、あらかじめ書かれた項目（昨年のアンケート結果や早期英語教育の観点から適当と思われるものを選び設定）から選択する設問と自由回答の設問からなっている。B園では当初年中・年長に分けて集計を行ったが、学年にかかわらずほぼ同様の結果が得られたことから、ここでは分けずにA園・B園のみで分類している。回収したアンケート数は、A園28、B園120であった。アンケートにご協力いただいた保護者の方々初め各園の園長、教員の方々には厚くお礼申し上げたい。

### アンケート結果と分析

#### 1. この幼稚園で英語活動を行っていることはご存知でしたか？

	A園	B園	計
知っている	18	80	98
知っていて、幼稚園を選ぶ際の参考にした	3	0	3
子供が幼稚園に入るまでは知らなかったが、今は知っている	6	18	24
知らない	0	2	2

このことから、ほぼ全員の保護者の方々が英語活動を行っていることを知っていることがわかった。B園では知っていて幼稚園を選ぶ際の参考にした保護者がいないが、これは英語活動を開始した時期が昨年度からであることから、年少（現在の年中）、年中（現在の年長）として、ほとんどの園児がその時点で既に入園していたからであろう。A園では英語活動の有無を「幼稚園を選ぶ際の参考にした」保護者が見られた。保護者の関心の高さがうかがわれる。

池中 雅美・米田 佐紀子・澁谷 良穂

2. 幼稚園から英語活動を行うことについてどう思われますか？

	A園	B園	計
賛成	28	112	140
反対	0	0	0
よくわからない	0	8	8

3. 2で「賛成」とお答えになった方は、その理由を選んでください。(複数回答 可)

	A園	B園	計
英語圏の文化に触れるチャンスだから	21	31	52
異文化や異言語に対する興味を早くから育てられるから	15	57	72
異文化や異言語に対する偏見やコンプレックスをなくせるから	8	17	25
外国人と話せるようにしたいから	5	12	17
楽しそうだから	13	63	76
小学校でも英語が始まると聞いたから	4	43	47
将来英語の成績がよくなると思うから	0	2	2
外国語の習得は小さいときから始める方がいいから	9	40	49
よい英語の発音を身につけて欲しいから	12	23	35
英語のリズム感を身につけて欲しいから	14	27	41
学校でないので意識せず、自然に英語の語感や聞く力を身につけられるから	14	52	66

2の結果から明らかなように、英語活動に反対と言う保護者はおらず、ほぼ全員が賛成していることがわかった。小さい子供達にとって一番身近な存在である保護者が肯定的な立場にあることは、英語活動を行う上で大変好ましい結果と言えよう。理由としては様々なものがあり、3では複数回答が可能であることからいろいろな意見が見られたが、特に多かったのが「異文化や異言語に対する興味を早くから育てられるから」「楽しそうだから」であった。後の方でも同様の意見が出てくるが、保護者は子供達が楽しく英語活動を行うことに最も重点を置いているように思われる。また異文化に触れるチャンスとしての位置付けにも高い評価を置いているようで、今後の英語活動の内容を考える上でこれらの点を考慮していくべきであろう。また「学校でないので意識せず、自然に英語の語感や聞く力を身につけられるから」という意見も多く見られた。反対に最も少数意見であったのは「将来英語の成績がよくなると思うから」であった。園児達はまだ発達段階でも初めの方にあり、また現在週に1回程度で行っている活動では、英語力がつくと思わないという考えもあるかもしれないが、それよりむしろ子供達が楽しく英語活動をし、学校の成績に関係なく、のびのびと異文化・異言語に触れて欲しいと言う保護者の願いの表れではないかと思う。

今回のアンケート調査の結果、A園とB園でほとんどの項目において顕著な差が見られなかったが、「外国語の習得は小さいときから始める方がいいから」「小学校でも英語が始まると聞いたから」の項目でB園がA園をかなり上回る結果となり、B園の保護者の方が年齢面や、近づく小学校入学を意識しているのではないかとと思われる。これは地域差(B園の方が地域に密着しており、地元の公立小学校に行く割合が高いと思われる)によるものなのか、保護者の背景・考えの違いに

よるものなのかは本アンケートでは明らかではない。上記以外に、「異文化に触れることは国際社会で大事だが、義務化するには国の政策が整っていないので、活動の進め方がむずかしい。」といった意見もあった。

#### 4. 2で「反対」とお答えになった方は、その理由に丸をつけてください。(複数回答 可)

早期英語教育で見られる反対意見を「理由」として列挙したが、1の結果から幼稚園での英語活動に「反対」の保護者はA園・B園とも皆無であった。項目としてあげたものは、「小さい子には英語や異文化に触れる教育はまだ必要ないから」「どうせ忘れるのであまり意味がないと思うから」「小さな子に英語は難しすぎるから」「日本語に影響が出ると困るから」「自分自身、英語や異文化が好きではないから」「早い時期に英語嫌いになると困るから」「幼稚園ではもっとほかに大切な教育すべきことがあると思うから」などである。

#### 5. 幼稚園での英語活動に何を期待していますか？(複数回答 可)

	A園	B園	計
英語圏の文化に触れ、慣れること	17	30	47
将来、外国人と話せるようになること	4	10	14
小学校英語の予習	1	17	18
子供が楽しく英語を学ぶこと	22	108	130
将来、英語の成績がよくなること	0	3	3
よい英語の発音を身につけること	11	33	44
外国の言語や文化に対する興味を育てること	18	50	68
英語の単語を増やし、覚えること	6	26	32
英語の歌や遊びを覚えること	12	41	53
特に何も期待していない	1	2	3

この結果から、「子供が楽しく英語を学ぶこと」を望む保護者が圧倒的多数であることが明らかである。これは上の3の結果とも一致している。現在行っている英語活動では子供達が短い時間の中で英語を吸収してくれることを願いつつ、アクティビティでは手遊び・歌・ゲーム等を通して楽しく学ばせることを主眼としているので、アンケート結果から我々の英語活動と保護者の願いとが同様の方向性を持っていることがわかった。次に多かったのは「外国の言語や文化に対する興味を育てること」や「英語圏の文化に触れ、慣れること」であった。園児にとっては日本語のみの生活から、週に一度普段と全く異なる言語に触れることで、好奇心を刺激され、自分と違うものに対する興味を持つようになると思われる。「英語などの異言語を特別なもの、むずかしいものと感じないように育て欲しい」という意見もあった。文化面ではハロウィーンやクリスマスなどの欧米の行事を取り入れているが、さらに異文化に触れる機会を増やせればと思う。

いわゆる「英語」という面では、「英語の歌や遊びを覚えること」「よい英語の発音を身につけること」という意見が多かった。歌や遊びに関しては上記の「楽しく学ぶ」に通じるところがあるが、

英語の発音面については、自由回答の中で「柔軟で頭で考えすぎない幼児期にこそ正しい英語の発音が身に付けられると思っている」という保護者の意見が複数見られた。これに関しては我々も幼児期に英語活動を始める最も大きな意義の一つが「発音」であると考え、その点を重視した指導を行っているので、同じく自由回答で何人もの保護者から「子供の発音が良くて驚いた」といった観察が述べられていたのはうれしいことであった。

上記以外に、「子供の教育は期待通りには行かないが、それでも0よりは0.1でも興味・関心が芽生えてくれればいい」「将来宇宙船地球号の乗組員として責任を果たすきっかけになればよいと思う」などの積極的・肯定的な意見、そして少数意見として「もっと書くほうもやって欲しい」というものも見られた。

#### 6. ご自宅で、英語に関することをなさっていらっしゃいますか？

	A園	B園	計
している	17	35	52
何もしていない	10	85	95

#### 7. 6で「している」とお答えの方は、具体的に何をなさっていらっしゃいますか？

	A園	B園	計
英語または英会話の塾に行っている、あるいは家庭教師に習っている	6	30	47
英語のテレビ番組やビデオを見せたり、ラジオやテープを聞かせている	14	10	14
日頃の家庭での会話でも英語や異文化に興味を持つような話しかけをこころがけている	7	17	18
一緒に身近なものを英語で言ったり、英語の歌を歌ったりしている	11	108	130
子供が英語で何か話をしたときは、ほめてやる	7	3	3

これまでのほとんどの項目でA園、B園に顕著な違いは見られなかったが、6では数字が逆転した結果となった。A園では自宅で英語に関することをしている家庭の数がしていない家庭をかなり上回ったが、B園では逆に何もしていない家庭の方がずっと多かった。これは地域差なのか、保護者の関心の有無あるいは（教育・社会的）背景によるものなのか明らかではない。具体的な活動では「一緒に身近なものを英語で言ったり、英語の歌を歌ったりしている」家庭がかなりの数に上っていたが、これはこういった活動が小さな子供達にとっても保護者にとっても一番自然でしやすい形だからであろうと思われる。特にB園で「英語または英会話の塾に行っている、あるいは家庭教師に習っている」というのが見られた。

これ以外では、「簡単な英語の本の読み聞かせをしている」「特に見せているわけでないが、NHKの『英語であそぼ』『エイゴリアン』などを喜んで見ている」「パソコン学習で発音とスペルを覚えていく仕組みの教材を使っている」といったものもあった。また「親自身がすすんで教えているわけではないが、興味を持って質問してきたら答えたりする」というものもあったが、逆に「何度も繰り返すうちに覚えるから、ふとした時に、例えば「お化けって何ていうんだっけ？」と忘れたふりをして教えてもらうようにしている」という積極的なものもあった。

8. この幼稚園で英語活動を始めてから、英語や異文化に対するお子様の態度などに何か変化があったと思われますか？

	A園	B園	計
はい	19	45	64
いいえ	6	12	18

上記に見られるように何らかの変化があったと答えた人が何もなかったという人を上回った結果となった。具体的な変化は以下の通りである。

9. 8で「はい」とお答えの方は、具体的にどういった変化がありましたか？（複数回答 可）

- (1) 家で英語活動の話をするようになった。

- ・「幼稚園でこういう歌を歌ったよ」といって歌を歌う、片言で英語の歌を歌う。（複数回答）
- ・一学期の頃、*Head, Shoulders, and Toes* が気に入って何度も楽しそうに歌って遊んでいた。
- ・*Hello, Hello, What's your name?* を歌う。
- ・手遊びを見せてくれた。（複数回答）
- ・英語で数を数えたりする。
- ・習った単語や文章を教えてくれる、家族に教えようとする。（複数回答）
- ・「フルーツバスケットをやったよ」「イチゴは strawberry」「桃は peach」（複数回答）
- ・「お母さん、イチゴって英語で何ていうか知ってる？」
- ・とても英語らしく banana を発音、母音・子音にも気をつけている、発音がとてもいい。

（複数回答）

- ・「Witch ってなーんだ？」「魔女だよ、びっくりした？」
- ・ハロウィーンの話をしてくれた。「Trick or Treat!」
- ・いろんな言葉に対して、「英語ではどう言うの？」とよく聞くようになった。
- ・テレビで外国人が話していると、「英語しゃべっている！」と今まで言わなかったことをいう。
- ・文章や動詞（“My name is ....” “What's your name?” “What do you see?” “Hi.” “How are you?” “I'm fine.” “Catch.” など）を言う。
- ・動物（cat, dog, gorilla, elephant, octopus, chick, tiger, penguin など）、果物・野菜（pumpkin, apple, cucumber, green pepper, onion, potato など）、物の形（triangle, square, circle, heart など）、色（white, red, yellow, blue など）の単語を言う。（複数回答）
- ・小学生の上の子と習ってきた言葉を教えあっている、違いを比べたりもしている。（複数回答）

ここで興味深いのは、親が強制しなくても園児達が家庭で自分から積極的に英語を口にしたがり、楽しんでいるように思われる点である。例えば「習った単語や文章を教えてくれる、家族に教えようとする」「お母さん、イチゴって英語で何ていうか知ってる？」「ハロウィーンの話をしてくれた」など、幼稚園で触れた異言語や異文化について、家族に伝えようと自分から働きかけているということから、園での活動が子供達にとって楽しい体験であったことがうかがえる。また同様に新しいことを学ぶことが園児達の知的興味を刺激しているように思われる。

(2) 日常生活の中で英語を口にする。

- ・熊を見て、“brown bear”と言った。
- ・“Stand up.”と言って立つ。
- ・寝る前に“Good night.”
- ・“Good bye.” “Good morning.” “Oh, no.” “Sorry.” “All right.” “Thank you.”などを気軽に使っている。
- ・果物を食べながらその名前を英語で言う。
- ・バスから降りて先生に、“See you.”人と別れるときにも。
- ・おいしいときに、“Yummy.”と言った。

以上から、かなり日常の中で抵抗感なく英語を使っている子供がいることがわかり、英語活動が子供達にとって教室の中だけでの「英語のお勉強」でないことが見て取れた。中学校以上では英語が学校の科目であることから、こういった日常に溶け込んだ英語というのはなかなかむずかしい。筆者も短大で教えていて特にその点で歯痒い思いをすることが多いので、こういった点にこそ早期英語教育の意義があると心強く思った。

(3) その他

	A園	B園	計
外国の人に対しての抵抗感が減り、親しみが増したように思う	2	1	3
英語や外国語に対しての抵抗感が減り、積極性が増したように思う	3	3	6
英語活動を楽しみにしているようだ	9	73	82
英語活動をいやがっているようだ（もし理由がわかれば書いて下さい。）	0	0	0
テレビで英語の歌や遊びが流れると興味を示したり、一緒にやろうとする	16	61	77
英語のリズム感が身に付いてきたように思う	0	5	5
英語の発音がよくなったように思う	8	16	24

ここで最も多かった答えが「英語活動を楽しみにしているようだ」という観察であった。これは指導員にとって意図していることの1つであり、また下記にあるように保護者にとっても一番の願いである。実際に子供達が活動を楽しみにしていることがわかったのは喜ばしいことであった。

「テレビで英語の歌や遊びが流れると興味を示したり、一緒にやろうとする」というのは、(1)や(2)同様、子供達の積極性をうかがわせる観察である。また「英語の発音がよくなったように思う」という意見も複数見られ、中には“Fish”を言うときにはちゃんと下唇を噛んで言っている」という具体的な観察もあった。

ほとんどが非常に肯定的な観察であり、特に今述べたように子供達の英語に対する積極性（自分から聞いて発音するなど）を表しているが、中には「普段使わない言葉をなぜやっているのか、なぜ英語かと思っているようだ」というものもあった。これについては、世界にはさまざまな言語・文化があり、日本語だけではないということを普段の園生活や家庭でも折に触れて話していただけるとよいのではないだろうか。



10. この他、お気づきのことがありましたら、何でも自由にご記入ください。

- ・外出先で外国人を見ると、(聞き耳をたてて) とても興味深く見ている。話し掛けられるのを待っているように近づいていく。
- ・できれば日本人教師でなく、外国人の子供や教師と触れ合って欲しい。
- ・英語活動のことは全く話さないのでは内容はわからないが、いやではないようだ、楽しんでいる。

(複数回答)

- ・子供の発音がしっかりしていてびっくりした。これくらいから始めると頭でなく耳から入るので、とても発音がいいように思う。まねできない発音で話すことがあり、驚いた。(複数回答)
- ・大人になっていろんな人々と交流できるように語学を通してグローバルな感覚を身に付けてもらいたい。
- ・覚えさせることを目的とせず、楽しく英語に接する機会になって欲しい。(複数回答)
- ・小学校英語、幼稚園英語ともに中途半端なことしかしていないので、意味があるのか、効果があるのか、目的は何なのか疑問。上の子が英語教室に通っていたが、何の効果もなかったように思う。もっと頻繁に英語に触れなければ、忘れる。ただ、遊びでやる分にはいいと思う。

(複数回答)

11. 今後英語活動でやって欲しいことが何かありましたら、何でも自由にご記入ください。

- ・英語活動の様子がわからないので、ビデオにするとか、参観して、見せてもらいたい。

(複数回答)

- ・活動内容や子供達の様子をお便りやプリントにしてもらえると家でも復習して教えられる、歌と一緒に歌いたい、指導要項などあれば見たい。(複数回答)
- ・今後も楽しくやって行って欲しい。(複数回答)
- ・単語より、簡単な歌や体を使った遊び歌などを多くとりあげてほしい。(複数回答)
- ・英語にこだわらず、異文化に触れる機会を増やして欲しい。外国の行事・文化等を遊びの中に交えながら教えて行って欲しい。(複数回答)
- ・外国人教師に教えて欲しい。日本人教師は発音が良くないので、外国人に教えて欲しい。外国の子供達に触れる機会を作って欲しい。(複数回答)
- ・小学校に行く前にアルファベットや単語が書けるようにしてほしい。
- ・小さいときに覚えたことは大きくなっても覚えているので、どんどん楽しく学んで欲しい。
- ・今のままで充分。今の調子で楽しく。(複数回答)

以上、ざっと列挙したようにさまざまな意見・評価・希望等が寄せられた。特に多かったのが、「英語活動の様子がわからないので、ビデオにするとか、参観して、見せてもらいたい」といった意見であった。ここから保護者の方々の関心が高いことがわかる。今後それぞれの園と相談の上、参観の時間を取るなどしていく必要がある。

池中 雅美・米田 佐紀子・澁谷 良穂

また「活動内容や子供達の様子をお便りやプリントにしてもらいたい」「歌と一緒に歌いたい」といった意見も多く寄せられ、どんな活動なのか知りたいという関心の高さはもちろん、保護者が園や英語指導員にまかせっきりでなく、自分達も積極的に関わろうという姿勢を持っていることがわかった。これは早期英語活動をすすめていく上で大変心強いことである。必ずしも「(プリントがあれば)家でも復習して教えられる」からでなく、それよりむしろそういった保護者の積極的・肯定的な姿勢そのものが子供達の異言語・異文化に対する興味をはぐくむと思われるからである。また歌と一緒に歌うというのも、保護者・指導員の目指している「楽しい英語活動」にとってプラスになると思われる。お便りやプリントについては園と相談してどうするかを考えていきたい。

今後これらのアンケート結果を参考に各園と協力しながら、保護者の方々の関心の高さ・期待に応えるべく、いっそう内容・指導法の充実を図っていきたい。

(第三章担当：澁谷良穂)

## 結 論

以上見てきたように、幼児期における英語活動の意義が徐々に保護者に理解されつつあると同時に、参観を希望する保護者が多いなど、保護者も積極的に子供の英語学習に関わりたいと考えていることがわかった。今回出てきたさまざまな意見を参考にしながら、今後の英語活動に生かして行きたいと考えている。